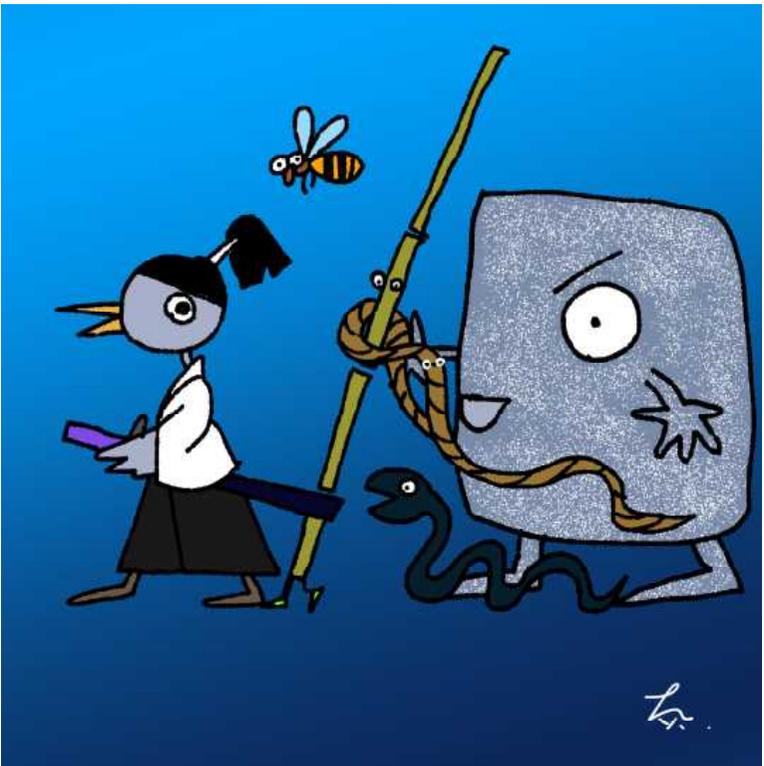


河原雀の敵討ち・仁多郡奥出雲町竹崎 令和4年3月15日

収録・解説・酒井 董美^{たによし} イラスト・福本 隆男



語り手 田和朝子さん（明治40年生まれ）
収録・昭和47年5月6日

あらすじ

昔、河原スズメが子を生んだげな。鬼がそれを聞いてやつて来て、「河原スズメさん。おまえ、子を生みなさったそうだが、見せてごらんか。おら、赤ん坊見に来たが」子どもを鬼の前へ出したら、「いい子だことはいいい子だが、目が片細い」と言つてゴンピリ飲んでしまった。それから、「もう一つ見せつさい。こんだ飲まあへんわのう」と言う。出したら、「いい子だことはいいい子だが、こらあ鼻の穴がひとつ細い」と次々飲んでしまつて、それから、「さいなら」と帰つてしまつたげな。河原スズメが腹を立てて、「かたき討ちい行く」とキビ団子をこしらえて、行つていたら、マムシが道のへりから出たげな。「河原スズメさん、おまえはどこへ行かつしやりや」「おらあ、鬼のところへかたき討ちに行かあかと思う」「そのキビ団子を一つこさつ

しやい。おらあついて行くけん」マムシはキビ団子をもらつて食つてついて行くげな。今度はハチもキビ団子をもらつてついて行く。竹の棒も団子をもらつてついて行つたげな。そのようにしてドングリやぐされ縄や白やカニやクモなんかもキビ団子をもらつて行つた。鬼がおる家の障子の穴から見たら、鬼はいい火をたいて居眠りしていたから、河原スズメが、「だれんも集つて言いことを聞いてごせえ」と、だれにも役割をしてから、今度は手をふつたげな。ドングリはいい火の中へとんだげな。竹の棒がかまどから、いろりを混ぜたら、パツーンと鬼の背へ火の粉が跳んださうで、「やあれ熱いなあ。火傷けどにや味噌とやれ」と味噌桶の味噌を出そうと手をつつこんだら、マムシがガーンズリかんで、「こりやあ痛あていけんわ。早、水の中へと水の中へ手をつけたら、カニがズーンガリつめつて、「こじやあいいけん、後ろ口へ出よう」と思つたら、赤んバチが来て刺したげな。今度

は、玄関口へ出ようと出かけたら、クモの巣が顔へいっばいひつついて、目が見えん。戸口へ出ようかと思つたら牛の糞を踏みつけてすべつて転んだら、上からくされ縄が、手を放したさうで、ストーンと白が落ちてきて鬼を押えつけ、そこへ河原スズメが行つて、鬼の首い切つて、かたきを取つたげな。それ、昔しこつぼし。

解説

河原スズメというのは、セキレイの地方名であり、『島根県方言辞典』（島根県方言学会）にも出ていた。関敬吾著『日本昔話大成』で調べる」と、動物昔話の「雀の仇討」として出てくるのがそれである。これで見ると、助太刀はドングリ、針（ハチ、ムカデ）、カニ、牛の糞、白などであり、おおむね田和さんの話に符合するが、クモ、竹の棒、くされ縄は田和さんの話にはあつても、関敬吾博士の分類の中には登場してこない。そのようなところを地方色を認めることができる。また、「サルカニ合戦」や「サルの夜盗」などの話とも交錯しているのである。（元島根大学法文学部教授）

